

こんにちは、古賀市し尿処理施設「海津木苑」です。

海津木苑は、市内から発生するし尿や浄化槽汚泥等を安全に適正処理する施設です。

5回目となる今回の『うつぎえんだより』では、『日本のし尿処理施設の今昔』をお話します。

日本のし尿処理施設の今昔

日本のし尿処理の歴史は、古代から現代まで、まちの発展と深く結びついています。

人が生活するうえで必ず発生するし尿は、古くはなんの処理もされず垂れ流しの状態でしたが、鎌倉時代ごろからは、肥料として利用されるようになり、明治時代になって、ようやくし尿を廃棄物として衛生処理をする考えが生まれましたが、まだまだ十分ではありませんでした。

第2次世界大戦が終わってからも、都市部ではし尿が溢れ、各地で無秩序な投棄が行われて環境汚染や伝染病、寄生虫などによる健康被害が全国で発生するようになりました。

これではいけないと、欧米の下水処理技術を参考に、微生物で分解する処理方法を採用したり、収集や運搬の方法に関する技術を開発するなど、日本独自の「し尿集約処理システム」がつけられました。

昭和30年代では、1kℓのし尿を処理するのに19kℓの希釈水が必要でしたが、昭和50年代には必要な希釈水が9kℓまで減り、昭和60年代には希釈水を使わなくて済むようになりました。

また、窒素やリンといった成分も除去できるようになるなど処理方法はどんどん進化していきました。

近年では、さらに環境に配慮した次世代型し尿処理施設と言われる「汚泥再生処理センター」がつけられるようになりました。この施設では、従来、処理過程で発生する余剰汚泥（水分82%）を、清掃工場で助燃剤（ごみを燃えやすくするもの）として活用可能な70%以下にできるなど、し尿を廃棄する施設から再生する施設に進化しています。



現在建設中の古賀市汚泥再生処理センター海津木苑（仮称）は、本年12月完成予定です。

建設工事進捗状況

古賀市汚泥再生処理センター海津木苑（仮称）工事



お気軽にお立ち寄りください

第11回 古賀モノづくり博「食の祭典」

5月21日（日曜日）9：00～15：00

海津木苑では食の祭典開催時にパネル等による施設啓発を行っています。

令和5年3月27日

工事進捗率 **61.0%**（令和5年3月31日現在）